

でなされたか残念ながら明らかでない。

ドイツ留学に出発したのは明治18年になってからであろう。いずれにせよ、この留学は彼の軍人としての生涯を決定した重要な出来事だった。

だがドイツ留学時代のことは、ポツダムにあるプロイセン陸軍士官学校を卒業し、同国歩兵少尉に任じ、晋国第6軍団第12師団第22旅団第32連隊付に補せられたということ以外詳しいことは明らかでない。大学に留学した場合は、現在それぞれの大学の文書館に学籍簿その他の資料が保存されているのが普通であり、それによって調査が可能である。だが、寅太郎のようにプロイセン陸軍士官学校など軍関係の学校に留学し、卒業後ドイツの軍隊に入隊した人の場合は、史料が散逸していて調査が困難である。ちなみに、『特別資料展・ドイツ兵士の見たNARASHINO』（平成12年）には18歳の時ポツダムで写したものと、25歳のドイツ士官学校時代のベルリンでの写真計2葉が収められている。いずれも若き日の寅太郎の姿を伝えていて興味深い。



西郷寅太郎  
(18才の時、ポツダムで)

だがいずれにせよ、留学によって寅太郎はドイツ式軍隊教育を十分に受けたと見てよいであろう。当時は我が国の陸軍はそれまでのフランス式からドイツ式に代わる時期に当たっていたので、ドイツの軍人教育を身を以て体験した彼の存在は貴重であったろう。帰国後寅次郎は明治25年に陸軍少尉に任ぜられたが、日本の少尉になる前にプロイセンの少尉になっていたわけだ。

日清戦争の時は近衛第3連隊付き又歩兵55連隊に属し出征し、明治35年には父隆盛の偉勲により華族に列せられ侯爵を授けられた。大正5年には歩兵大佐に進み、第一次大戦の日独戦役にはドイツ通の故を以て千葉県習志野俘虜収容所の所長に任命された。貴族院議員でもあった。だが鹿児島新聞によると、寅太郎は大正7年11月頃より風邪気味で引き籠もり臥床中のところ、師走末より容態が陰しくなり種々手当をしたが甲斐なく、遂に1919年（大正8）1月元旦東京麻布の自宅で薨去した。53歳だった。墓は青山霊園にある。

## 五高初代ドイツ語教授 賀来熊次郎

賀来熊次郎は1860年（万延1）3月27日、現在の大大分県宇安心院町佐田に生まれた。父は惟寧といい村の素封家であった。賀来氏一族からは幕末から明治にかけて医者・本草学者・術衛家・興業家などすぐれた人物が輩出している。多くは帆足万里の門下であった。熊次郎の祖父賀来惟熊は、幕末明初の公益事業家として多大の功績があった人で、人となり剛毅果敢にして気節を重んじた。父を早く失った熊次郎はこの祖父の感化を受けて育った。初め漢学を学んだが、1871年（明治4）に豊津育徳館（翌年、行橋洋学校と改称）に入学し、蘭人カステールについて英語を学んだ。



賀来熊次郎

1875年（明治8）秋、賀来は笈を負うて上京した。そして当時本郷にあった壬申義塾に入り、初めてドイツ語を学んだ。その動機は明確でないが、先祖に医者や本草学者にいたことや、のちに東大医学部予科に学んでいることを考えると、将来医者になるためのドイツ語修業ではなかったか。本郷や神田には幾つもの独逸学塾が生まれたが、壬申義塾はその代表的なものである。だが、賀来はここは一年でやめ、本格的にドイツ語を学ぶために東京外国語学校に入学した。しかしここも一年で退学、1877年（明治10）9月、今度は東大医学部予科に入学した。「抑々本学部予科は、本科に於て、多数の独逸教師が独逸語に依りて医学及び製薬等を教授するを以て、直接独逸語の講義を聴き得る程度に熟達せしめ、…」(『東京帝国大学五十年史』上巻)とあるように、予科ではドイツ語とラテン語に最も重点が置かれた。賀来のドイツ語の師はR・ランゲ、P・マイエット、川上正光等であったと思われる。結局、賀来は本科には進まなかったが、彼の語学力は高度な域に達していたと判断される。

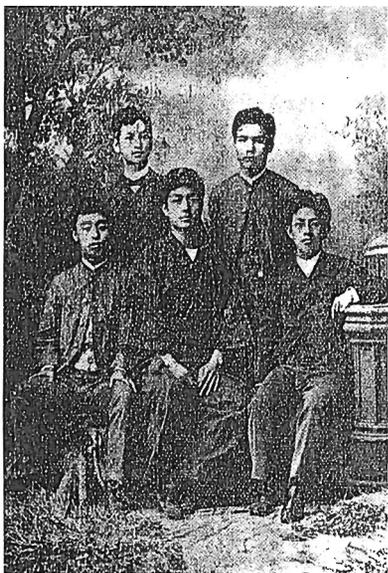
さて、賀来は東大医学部予科を終えると、明治法律学校（明治大学の前身）で学んだのち、1885年（明治18）内務省警保局に勤務することになった。警保局長の清浦圭吾は、わが国の警察制度の近代化のために、とくにドイツの警察制度の導入に熱心であった。賀来はここでドイツ警察刑法の翻訳の仕事をしたが、注目すべきは、警官練習所で訳官を勤めたことだ。当時外国との条約改正が重要国策であり、そのために警察事務を改善して近代化することが急務だった。そこで警察幹部の養成のために警官練習所を設け、ドイツより警察大尉ヘーンと警察曹長フィガセウスキーを招聘して、彼らの講義と訓練によって組織の整ったドイツ警察を模範とする近代的警察の確立を目指したのである。ドイツ人講師が口述したのを訳官が傍らにいて翻訳したのが『警察講義録』として残されている。訳官には賀来のほか、久松定弘、湯目補隆等錚々たる独逸学者がいた。

賀来が五高の前身の第五高等中学校の独語教師に就任したのは1888年（明治21）9月である。以後、三高に転任するまでの10年間、五高ドイツ語科の基礎固めと発展に尽くした。この間『独逸語学階梯』『独逸語学階梯案内』『シラー歴史小品』の編著があるほか、『龍南会雑誌』にも歴史・地理などの論文5編を寄稿した。独語教科書にはヘステル読本、シェーフェル文典、ウェーベル万国史等を用いたが、とくにコンフォートのジャーマン・コースは8年間も使った。これは内容が豊富で実用向きに作られていた。賀来が該書をそれほど愛用したことは（のちに三高でも使っている）彼が文学趣味に偏すること無く、実用面の語学を重視したことを示す。八波則吉は回想している。「私は今でも折々、生徒の時代に独逸語で苦しんだ事を夢見る。予習をしていないのに当てられて、立ち往生している時に目が覚めて、あ、夢でよかったと思うことさへある。其の折りの独逸語の教授は賀来熊次郎先生であった。前置詞を記憶するため、「アウフ、アウセルさっくらさのさ、ゲーゲンユーベルのう賀来さん、ミットナハフォンツーは皆ダチーフ、さいの」といふやうな歌を先輩から教へられていた。それから四十年後の今日では、賀来先生のお顔もやさしく、お声も澄みきって、叱られた教室までが絵のように思ひ出される」と。さて賀来は、明治31年（1898）8月、英語教授の中川久和とともに五高を去った。

その離熊は惜しまれた。同年11月発行の『龍南会雑誌』（第68号）に「中川賀来先生を送る」という文章が載っている。その著者は、教育家はその功績が大であっても一般の人々には知られず、平々凡々の名の下に一生を終わるのを常とするもので、「名利汲々たるの輩焉んぞ此職を盡すを得んや、只それ名利の汚流に超然として拮据数年、其守る処愈固く其執る処愈強きものに於いては、之を望むに暁天の星の如し、我中川賀来二先生の如きは真個に斯道に忠なるもの」と述べ、さらに賀来について、「資性温厚にして着実の風あり、先生は我校独乙語の祖栄と云ふべく、先生の薫陶を受けたる者、或は大学に入り、或は大学を卒へて社会に闊歩するもの挙げて数ふべからず、…」とその功績を讃えた。

三高時代の彼はドイツ語科の長老として重きをなしたが、その町儒者風の恬淡とした性格は、東大独文科出の若い教師たちの世渡り上手とは対照的であった。しかもそうした旧タイプの教師の人間ばなれしたところが、却って生徒たちに好かれ、忘れがたい印象を残した。賀来が亡くなったのは1939年（昭和14）2月1日。享年80。墓は京都市左京区黒谷町30番地の瑞泉院に、女子教育に一生を捧げた妻常子のそれと並んで建っている。

## ベルリンの日高眞実



留学時代の日高眞実とその友人たち  
前列左から、沢柳政太郎、日高、清沢満之  
後列右から、上田万年、岡田良平

我が国で教育学専攻者にしてドイツに留学したのは、旧高鍋藩教授日高誠実の長子・日高眞実（1864-1894）を以て嚆矢とする。彼は帝国大学で哲学を修め、大学院に入り教育学を専攻した。明治1888年（明治21）7月選ばれて教育学研究のため独逸国へ留学を命じられた。留学先はベルリン大学で、3年間6学期を学んだ。明治25年2月帰国し、高等師範学校教授兼文科大学教授に任じられた。留学中は専門の学を究めて倦むことなく、また鋭意ドイツの教育の現状を観察した。これが原因で遂に肺病に罹ったと伝えられる。さてここでは学会月報にベルリンから寄せた日高自身の書簡と、当時同じくベルリンに留学中だった友人たちの見た日高の動静の一端を紹介してみたい。

学会月報第20号（明治22年10月）に「在伯林会員日高眞実氏の來簡」と題して長文の手紙が載っており、種々報告し意見を述べている。文明開化の国の西洋人は日本に来ると日本は不潔とか何とか悪口を言うが、理学士佐々木忠次郎の話よると仏国船中でコレラが発生し死者が出、マルセーユ沖の島の病院で検疫があった。しかしその施設はお粗末で不潔であった。また自分も現にベルリンの大道で夕方から夜にかけて放尿する男を何人も見かけた。これが西洋流の文明開化の真相だ、と日高は怒っている。しかるに西洋人の口まねをして得意然とした日本人がいるのは傍ら痛いことだ。田中館愛橘理学